

「伝道の夏」 片平 貴宣 担任牧師

夏も本番となり、暑さも厳しくなってきました。夏になりますと、神学生時代に遣わされた夏期伝道を思い出します。また、それらの出来事を通して行われる神さまの御業に心を寄せます。

私が初めて夏期伝道で遣わされたのは、福井県勝山市にある勝山自由キリスト教会でした。直前に行われたホーリネスの群首都圏夏期聖会の会場である軽井沢から、引率の先生の車に乗って直行したことを覚えています。こちらまじりとした教会で、宣教師館に寝泊まりしました。トラクト配りをしたり公園伝道をしたり、信徒さんのお宅に招かれてバーベキューをしたりしました。

そのお宅には男の子が三人おり、下の二人はまだ洗礼を受けていなかったのですが、後日、洗礼を受けたと聞かされ感謝でした。翌年には個人的に訪ねてみたり、牧師として石川県の教

会に遣わされたときには比較的近いところでしたので、何度か伺って交わりを持ちました。

夏期伝道中に起きた一番のアクシデントは、某T教会で起こった火事です。「なんだか煙が充満してる」月曜日の早朝、私はそんな言葉で起こされました。最後の奉仕であった日曜日のご用も終わり、あとは聖書学校に帰るのみ…だったはずのその日、事件は起こったのです。牧師館で寝ていた私を、一緒に行っていた神学生が起こしにきました。どうやら会堂の方で煙が立ちこめていて原因がよくわからないそうので、呼ばれるままにとりあえず私は会堂の方へ行ってみることにしました。あたりはまだ薄暗い中、教会の玄関のガラス越しに明るいものが見えました。「火事だ！」そう思った私は、牧師館の外の水道のところにバケツがあつたのを見つけ、水を入れて会堂の中へ入り、燃えているところへ水をかけて消火しました。いざ火を消し終え、教会のロビーを見回してみると、様子は一変していました。ソファアは骨組みだけになっていて、その下の床にも穴が開いていました。壁や天井は煤で黒くなっていて、礼拝堂には煙が充満していました。その隣の和室では一緒に居た二人の神学生が寝ていましたが、大事に至らなかったのは不幸中の幸いでした。

そのあとは警察や消防の方が来て事情を聴

かれたり、教会の掃除や換気をしたりといろいろと大変で、他の二人の神学生は予定通りに帰ったのですが、私は残ってそのあとの片付けなどを手伝いました。翌年の夏期派遣でも、その教会へ遣わされ、火事があつたことをみじんも感じさせないほどに復旧した様子を見る事ができました。神様の計画の不思議さと、その守りの確かさを、身をもって実感することができて感謝です。

また、夏と言えば夏期キャンプです。母教会に集っていた頃も参加しましたし、私が主に係わっているのはホーリネスの群の首都圏ユースバイブルキャンプと、近畿中部バイブルキャンプです。その他にも、夏期伝道で遣わされた各地域、あるいは教会で行われていたキャンプなど、様々なキャンプに参加しました。

いずれのキャンプにおいても感じるのですが、参加した小中校生・青年たちは有意義な体験をし、人間的にも信仰的にも成長をいたします。友人ができて、その距離が近づき、神様とも親しい時間を過ごします。これは、普段の礼拝ではなかなか得難い体験です。

私も、キャンプがきっかけで出会った友人がおります。今はその方も牧師をしています。信仰の友の繋がりはたとえ遠く離れていたとしても切れることはありません。

この夏も、三名の中学生がバイブルキャンプに参加しますし、教会でも小学生のキャンプが計画をされています。普段から子どもたちの教会に来ている子どももちろん参加をしますが、あまり来ることのできない子どももキャンプには参加します。「こんな時だけしか来ないなんて…」と感ずることもあります。「キャンプが楽しかった」との思い出は、確実に子どもたちの心に残ります。それと共に御言葉が残ります。

すなわちそれは、「教会は楽しいところだ。御言葉は喜びだ。」という思い出を子どもたちが得る体験となります。そうならば必然的に子どもたちは、教会に集うことを自ら望んで選ぶようになるでしょう。その「時」がいつになるのか、私たちには分かりませんが、「今や、恵みの時、今こそ、救いの日。」(コリント Ⅱ六・二)との御言葉を受け止め、この夏も神様の導きを信じつつ歩みましょう。